

第二六節 ほかの人がびとの共同存在と日常的共同存在

- 「たいていそこに身をおいている存在様相の分析」から「日常的現存在はだれか」を答えようとする (p. 252.)
- すでに世界=内=存在の構造契機は世界の説明によって示された
 - 「誰か」の問いの解答もすでに準備されている
- 環境社会を記述したとき
 - 使用中の道具に伴って、その製品が予定されているほかの人も「一緒に出会う」
 - 用具的なものの中にそれを使用する人々への本質的な指示関係が含まれている
 - Ex: 「供給者→サービスの良い人」 「畑に沿って歩く→誰々の畑」 「読んでいる本→誰かから贈られた本」
- 「『事物』はそれらがその中でほかの人がびとによって用具的に存在しているその世界の中から出会う
- ほかの人は事物に後から付け足して考えられるようなものではない
 - その世界：いつでもすでに私の世界である
- ほかの人は、世界の内部で出会うながら、それ自身も世界=内=存在というありさまでその世界の「なか」で存在している
- この存在者「ほかの人は」は客体的、用具的に存在しない
- 「ともに居合わせて現存する」
- 上記の説明は各自の現存在を基準としたものなのでは？
- 孤立した主観を出発点としているのでは
 - このような誤解を防ぐためには「ほかの人は」の定義が必要
- 「ひとがたいは自分と区別しないではないでいる人びと、そのなかに自分も加わっている人びと」 (p.260.)
- 「ともに」：現存在的なもの
- 「もまた」：配視的=配慮的な世界=内=存在として同じ在り方
 - 実存論的に理解すべき ✕ カテゴリー的
- 世界はすでに、ほかの人がびともわかっている世界
- 現存在の世界は共同世界
- 環境世界でほかの人がびとと出会うその実態を見失わないことが重要

- 現存在が自分を見出すのは、身近に配慮されている環境的な用具的存在者において
 - ほかの主観と区別して自分が発見されるわけではない
- 「ここにいるこの私」は現存在の空間性から理解されなくてはならない
- 配慮する現存在が身を置いている用具的世界の「あそこ」から自分を了解する (p.262.)
 - 場所を表す言葉には副詞的意義と代名詞的意義、どちらから根源的か、という問いは無意味
 - 場所副詞だと思っているものは現存在の諸規定
 - これらの意義は副詞と代名詞の分化以前にある
- 我々はほかの人がびとに出会うとき、「何かに携わっている彼」に出会う
 - 単に人格的事物としてであろうのではない
 - 彼の世界=内=存在において我々は彼に出会う
- 共同現存在：「存在するほかの人がびとがそれを見越して世界内部で明け渡されているところのその存在」 (pp.263-4.)
 - 共同現存在が開示されているのは現存在が本質上、共同存在のため
 - わたしのような人がほかにもいる ✕
 - 共同存在はそのつど発生する性状にすぎない
 - 相手が不在であることは共同存在を前提としていない
 - 孤独とは共同存在の欠如的形態
 - 大勢のなかで孤独を味わう
 - 無関心や疎遠といった共同現存在の様態を表している
- 共同存在：各自の現存在の性格
 - 共同現存在：ほかのひとの存在を性格づける言葉
 - 共同存在に対してほかの人の世界を通して開け渡されている限りにおいて
- 現存在一般の存在→関心
 - 用具的な存在との交渉→配慮
 - 配慮と関心の類似点
 - 共同存在という存在様態も世界の内部で出会う存在者に関わり合う
 - 相違点

- げんそんざいが共同存在という様相で関わる存在者は用具的存在様相を持たない
- 現存在は配慮ではなく、待遇される
- 待遇：配慮と同様に実存範疇として理解する
- Ex: 「素通りする」「無頓着に存在する」
- こうした無関心の様態こそが、日常の平均的な相互存在を特徴づけている
- 任意の事物が無関心に集合していること／現存在が相互に無関心の様態で存在していることは
- 存在論的には本質的な差異が存在している
- 待遇の積極の様態2つ
- 相手から「苦勞」を除去すること
 - 配慮に対して飛び入りし、相手の身代わりをつとめてあげられるもの
 - 支配関係に陥りやすい、世話を受ける相手に気づかれない
 - たいていは用具的なものの配慮に関わる
- 相手に率先すること
 - 彼が配慮できるものとして還元するために行う
 - 彼の実存に関わる
 - 彼がそれへむかって自由になる(?)
- 同一なことに従事しているという相互存在はやがて疎隔と隔意の様態へと移っていく
- 「同じ大義に尽力するという共同の使命感は各自がみずから選び取った現存在にもとづいて規定されている。こうした本来的な連帯性があってはじめて…(省略)即時性も可能になる」(p.268.) (?)
- 日常的相互存在は待遇の2つの様態の間に身を置いている
- 待遇には心遣いや思いやりに導かれている
- 世界は世界内で出会うものとして道具だけでなく、ほかの現存在をも明け渡す
- 有意義性の指示連関は他人事ではない自己の存在に関わっている現存在に繋ぎとめられている
- 自己の存在に関わっている現存在：いかなる趣向も持たないもの、現存在がそれを主旨として存在しているところの存在

- 現存在は共同存在としてはほかの人びとを主旨として「存在」している
- ほかの人びとが開示されているのは共同存在によってあらかじめ構成されている
 - ほかの人びとの開示も意味性——世界性の形成にあずかっている
- 環境世界において用具的なものと出会う際、ほかの人々の共同現存在がすでに居合わせている
- 現存在の存在了解にはほかの人々についての了解も初めから含まれている
- ここでいう了解とはひとつの根源的に実存論的な存在様相
 - 了解があつて初めて認識や知識が可能になる
 - 相手はさしあたり配慮的待遇のなかで開示されている
- 心理学の他者認識批判
 - さしあつたつて了解的相互存在の様態にすぎないもの(相手に向かっているたわりつつ彼を開示する待遇)が本源的に他者交渉を構成するものとなる
 - 現存在がもともと存在了解を備えている←この点に心理学は着目する
 - 「感情移入」
 - 他人は自己の複製になる
 - 「感情移入」も共同存在にもとづいて初めて可能
 - 共同存在においては欠如の様態が優勢を占めていることに由来
 - 最後の段落での問い
 - 「日常的相互存在としての存在を引き受けているのはいったい誰であるか」(p.275.)